

# 「屋台」に込めた アートと福祉



大鋸さん(手前左端)の好きなものを形にした作品「和洋折衷」の最後の仕上げに取り組み参加者ら。段ボールを削って枯れ山水の砂面を表現している

アートと福祉をテーマにした東京芸術大と松山大の公開講座「当事者との対話—ひみつジャナイ縁日をつくろう!」。制作された「屋台」3

作品がこのほど、松山市文京町の松山大樋又キャンパスに仮設営され、記録撮影が行われた。

## 松山大など公開講座

## 3 作品記録撮影



「天野班」の作品「あまのさんのがっしり」。地域の誰もが一つのテーブルを囲み談笑する憩いの場をイメージした



森畑さんの体験型アート作品の道具。かぶったら見えなくなる「帽子」や穴から音が聞こえてくる「みみの箱」など、工夫がいっぱい

## 道後「縁日」出展延期受け

講座は、開催中の「道後アート」の交流型プロジェクトと連動。学内外の約50人が参加し、ゲスト講師の障害者3人とともに共生や多様性についてワークショップで話し合い、それぞれのテーマに沿った「屋台」を段ボールで制作した。

講座は、開催中の「道後アート」の交流型プロジェクトと連動。学内外の約50人が参加し、ゲスト講師の障害者3人とともに共生や多様性についてワークショップで話し合い、それぞれのテーマに沿った「屋台」を段ボールで制作した。

完成した屋台は14、15日に道後地区でのイベント「ひみつジャナイ縁日」に出展予定だったが、新型コロナウイルスの影響で延期された。再開催(日程は未定)まで松山大で保存するが、区切りとして記録を残すため参加者らが手分けして設置した。

松山大学院社会学研究科の研究生の天野博之さんの班のテーマは「分断と統合」。障害の有無によって学びや暮らしの場が分断されないようにとの願いから、丸いテーブルを囲んで皆が集まり、語り合える場を制作した。

「天野班」の松山大人文学部社会学科2年奥平華奈さんは「さまざまな年代の人と話ができて、障害のことも全く感じず自由に制作できた。とても楽しく勉強になった。今後も福祉に関心を持ち続けたい」と振り返った。

市社会福祉協議会の地域福祉活動指導員で盲導犬と暮らす森畑裕子さんの班は「五感八感、いい伊予柑を制作。視覚障害があると「昼でも夜間のように感じられる」との言葉からイメージを膨らませ、段ボールの帽子をかぶって見えない状態でつえを頼りに歩いてみるなど、体験型アート作品に仕上げた。

難病「マリネスコ・シエーグレン症候群」の影響で車いすで生活、通学している松山大人文学部1年大鋸龍之助さんの班のテーマは「和洋折衷」。大鋸さんが好きな英国の大聖堂や日本の寺の枯れ山水、神社の鳥居などを自由に組み合わせ、楽しく不思議な空間を創出した。

大鋸さんは「みんなと一緒に作れて楽しかった。実際に展示できたなら、ぜひ中に入って体験してみたい」と笑顔を見せていた。

(早瀬昌美)